博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　芝野耕司　印

学位申請者　孟　達来

論　文　名　『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳方式の研究

【審査結果】

審査委員会は，芝野耕司を主査とし，本学から言語学の峰岸真琴教授，モンゴル学の二木博史教授に加え，外部から日本モンゴル学会会長の早稲田大学吉田順一名誉教授，元朝秘史研究の第一人者である東北大学栗林均教授を副査とし，孟達来氏から提出された学位請求論文「『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳方式の研究」の審査と最終試験を 2012 年 6 月 16 日に行い，全員一致で学位申請者に博士(学術)の学位を授与することがふさわしいと判断した。

【論文の概要】

本学位請求論文は，漢字とモンゴル語音とが漢字一字単位で対応するパラレルコーパスを構築し，このコーパス及び『元朝秘史』成立当時のモンゴル語と中原中国語との言語学的考察によって，漢字音訳方式の全容を解明しようとした論文である。

著者が独自に構築した漢字・モンゴル語音パラレルコーパスに基づくと，『元朝秘史』漢字音訳テキストは延べ 98,185 漢字から成り，581 の異なり漢字で 376 種のモンゴル語音を表す 807 種の対応関係によって，延べ 30,202 語のモンゴル語テキストが音訳されている。

この論文では，先行研究を踏まえ，モンゴル語音と漢字音との対応を考察し，当時の漢字音訳者が踏まえた伝統的中国音韻論に基づく 7 種の声母対応規則，21 種の韻母対応規則及び 7 種の末子音対応規則を導出した。その後，モンゴル語音と漢字音との対応を 1：1，1：N，M:1，N:M のすべての関係に対して，同値類に分け考察している。その結果，漢字音訳方式を基本音対応，意符，個義，文法的用法，末子音での声調，特定用字，巻偏在，誤りなど想定できるほぼすべての要因で 807 のすべての対応関係を分類することにより，漢字音訳方式の全容を解明しようとした点が高く評価された。

また，本研究が対象とする漢字音訳は，漢字文化圏を取り巻くインドからシルクロード，シベリア，朝鮮半島，日本，ベトナムを含め，日本書紀からサンスクリット仏典まで近代以前の諸言語研究の基本文献で用いられている文字表記であり，この表記法の解明は，モンゴル語に限らず，漢字文化圏諸言語の研究に重要な意味を持つ。

学位請求論文は，「第一部総論」102 ページと「第二部音訳における対応関係の分析」265 ページから成る全 367 ページの大著である。

「第一部総論」「第 1 章版本とテキスト・本研究に関わる先行研究」「1. 1. 版本とテキスト構成」では，研究対象である元朝秘史のテキストに関して，主要な伝本である十二巻本と十五巻本との二つの系統の検討を行い，本論文では諸本のうち最も良いとされる四部叢刊本の十二巻本を用いることとしたことが論じられている。なお，元朝秘史は，十二巻本，十五巻本ともモンゴル語を漢字で表記した音訳，漢字表記の右側に意味を表記した傍訳及び各節末に漢語白話文で訳した総訳の三つの部分からなり，本研究では，音訳部分の約 10 万字の漢字及び対応するモンゴル語音のローマ字表記に関する漢字一字単位での対応が可能なパラレルコーパスを構築した。

「1. 2. 本研究に関わる主な先行研究」では，服部四郎(1946)，Halliday(1959)から始め，漢語漢字音及び音表記，モンゴル語音及びテキスト転写に関する研究及び音表記以外の問題に関する主要な研究を近年の栗林(2006)までまとめた上で，問題提起を行った。

「第 2 章　本研究の目的・方法・検討項目」では，まず基本仮説として，漢字の形音義声調のすべての要素が音訳に関与していることを基本仮説とし，ローマ字テキスト転写については，Ligeti(1971)テキストをもとに吉田順一教授が作成されたローマ字転写テキストをベースに栗林均・确精扎布（2001）の転写を参照に、ローマ字転写に若干調整を行った上で，対応漢字を識別する数字を付与したテキストを作成し，独自に作成したプログラムを用いて漢字 1 字単位でモンゴル語音との対応が可能なフルテキストパラレルコーパスを作成した。

「第 3 章　漢語とモンゴル語の音韻体系」では，韻書に基づく服部四郎(1946)に対して，総訳が白話文であることに注目し北京官話の最も古い文献として記述言語学的に分析した Halliday(1959)を基本とし，中原音韻に関する最近の楊耐思（1981）の研究成果を考慮し，当時の中国語の中原音韻体系を再構築した。

モンゴル語音に関しては，漢字以外にパスパ文字，アラビア文字などの諸資料も考慮して検討した服部研究を基本とし，Ligeti(1971)でのモンゴル語音韻規則を考慮した上で，当時のモンゴル語音韻体系を再構築した。

「第 4 章 音訳におけるモンゴル語と漢語との音対応規則」では，こうした構築による両言語の音韻対応を当時の音韻論である声母・韻母及び末子音対応を基本として整理し，7 種の声母対応規則，21 種の韻母対応規則及び 7 種の末子音対応規則を導出した。

声母対応規則としては，(1)モンゴル語の有声子音が漢語無気子音によって，モンゴル語無声子音が漢語有気子音によって対応され，(2)モンゴル語非円唇母音に先行するゼロ子音が漢語声母/j/に，(3)モンゴル語円唇母音に先行するゼロ子音が漢字声母/w/に，(4)モンゴル語/q/が小書き「ᠬ」を付し，漢語声母/x/に，(5)モンゴル語声母/r/が小書き「ᠷ」を付し，漢語声母/l/に対応することが示された。

韻母対応規則としては，漢語の5母音がモンゴル語の7母音との対応を基本とする対応規則が明らかにされた。

また，末子音対応については，単独子音を表すために漢字の入声が用いられたことが明らかにされた。

「第5章　音訳における音以外要素の関与」では，字義，意符，文法要素及び語形に分け，コーパスから得られる用例の詳細な検討によって，それぞれの漢字の使い分けの分析を行った。

「第二部　音訳における対応関係の分析」では，漢字とモンゴル語音との807種の対応関係それぞれについて同値類に分け，1：1，1：N，M:1及びM:Nの種類ごとに個別対応関係の分析を行うことによって，漢字音訳方式全体の検討が行われている。

【評価】

以上の点が高く評価された一方で，各委員から幾つかの問題点も指摘された。

まず，当時のモンゴル語音韻体系の考察に関して，有声音無声音の対立を想定しているが，有気音無気音対立説もあり，この説についての見解を示す必要がある。

第二に四部叢刊本を底本とすることは必ずしも悪くはないが，十五巻本の写本にも良好なものもあり，また，校訂本作成の試みもあることから，底本に関するテキストクリティックが十分とはいえない。

第三に報告ではローマ字転写として，吉田順一氏による転写をもとにしているとしているが，Ligeti の転写との関係，ローマ字転写の詳細が明確でないことは問題であるなどの指摘がなされた。

これらの指摘された問題点について，申請者は，的確に返答するとともに，今後の研究の必要性も自覚しており，今後も研究を継続する中での改善を考えていることが示された。

学位請求論文の内容，最終試験における応答などから判断した結果，審査委員は，全員一致でこの研究が博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。